赤城南麓民家に於ける平面と構造の 年次的変遷について (No. 1)

—— 広間型について ——

正 会 員 桑 原 稔*

1. はじめに

ここにいう赤城南麓地方とは群馬県下における北橋・富士見・前橋・大胡・宮城・粕川・新里・大間々・玉村・伊勢崎の各市町村の行政区域をさす。これまで10年間にわたってこれらの地方で私が調査を実施した民家は80数棟である。

本論の目的は、当地方の民家形式の分類と、分類された遺構中、主なものを概説し、平面と構造の関連性を年次的に追求し、それらの発展過程を考察することである。

本稿はまず第一に当地方における最も古い遺構が示す平面形式の広間型について考察することとする。

2. 平面形式の分類

調査民家の現状平面は、一般に建築当初のものより室数が多く開放的になっている。これらを復原すると次のようら平面形式に分類される。

図—1

(A) 広間型, (B) 喰い違い四間取型〔図—1, (1)〕, (C) 不整形田字型〔図—1, (2)〕, (D) 田字型〔図—1, (3)〕, (E) 多間取型 (仮称)

赤城南麓地方は冬季に有名な北西からの「からっ風」が吹くため、屋敷の北西にはどの家も立派な屋敷林がある。外観は古い遺構では、軒の低い寄棟であるが、新しい遺構になると軒高を増し、屋根は入母屋となる。その上前面中央部を切り落して、いわゆる赤城型の屋根外観になる。調査地域は群馬県の中心部に相当するため近代化がいちじるしく、10年前と今日では村の景観がまったく異なるほど激しく変貌している。

以下に広間型遺構を10棟掲げるが¹⁾、その半数はすでに改築されていはいない。

3. 編年の指標

調査した広間型遺構中で建築年代の判明した民家は後

述のように No. 3 (元禄元年) だけで、他は不明であった。そこで、この民家の原形の各特徴と、他の民家の平面・構造・細部を比較して編年の指標を求め、全体の編年系列をつくると表—1 のようになり、大きくみてⅠ→Ⅱ→Ⅲの様式編年がえられる。Ⅰ期遺構は長者柱²⁾・大黒柱・下大黒柱が棟通りにたてられるもの、Ⅱ期遺構は長者柱が棟通りから離れるもののうち上屋柱がダイドコにたつもの、Ⅲ期遺構は長者柱が棟通りから離れ、さらにダイドコの上屋柱が省略されているもの、として編年区分をした。次に各遺構の平面と構造について編年順に説明する。

4. Ⅰ期広間型について

No. 1 梁行4間であるが、桁行はダイドコ東側の架構が数次にわたって改造されているため不明である。復原平面は 図—2 No. 1 のようになり、長者柱およびこ

図—2 Ⅰ期広間型復原平面図

れと対応するヘヤ・ザシキ境の柱では痕跡が重なり相互に対応せず (図—5), 当初からこの部分は古材を使用している。また、コザの表側半分はかなり古い時代にサマ³⁾に改造されているが (図—3, No. 1), この部分は No. 2~No. 8 までの遺構をみると土壁であるところから、当初土壁であったものと推定する。ヘヤは寝室に相当し、長者柱と対応するヘヤ・ザシキ境の柱では裏側の

* 群馬県立前橋工業高校教諭

(昭和46年5月11日日本稿受理・討論期限昭和47年9月末日)

表一 広間型民家編年表

			柱 間 装 置							構 造					仕 上・そ の 他					編 年・他	
NO	所 有 者	所 在 地	の表側 コザ(テイ)	ドの境 オクリ(ナン コザ(テイ)と	の表側 ザシキ	帳台 構	ザシキ境 タイドコ・	袖釜 スリ 柱	大の 黒逃 柱	棟の 柱と 位置	ザシキ境 コザ(テイ)と	軒の 構造	柱仕上 げの境 タイドコと	ト コ	コザ(テイ)の 幅	ザシキの 幅	役 職・家 柄	編 年 区 分			
			壁全 アリ	全分 壁	全分 壁	全分 壁	サマ アリ	全建 具	ア リ	ナ シ	ア リ	一 致	サシ・ ナシ	サシ・ アリ	フキ下 シ	セ ガイ	チ ョー	併 用	ナ シ	ア リ	
1	佐 藤 佳 俊	伊勢崎	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	?	15.10	落武者	I 期			
2	倉林大炊之助	前 橋	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.60	13.10	名 主				
3	細 野 正 一	前 橋	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	12.40	12.90	大名主	II 期			
4	阿久沢 秀 夫	宮 城	○	○		○	○	○	○		○	?	○	○	12.62	14.20	永代名主				
5	都 丸 二富士	北 橘	○	○		○		○	○		○	○	○	○	12.45	12.70	本百姓				
6	高 橋 勢次郎	〃	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	12.58	12.73	〃				
7	桃 沢 幾 喜	宮 城	○	○		○		○	○		○	○	○	○	12.45	12.45	〃	III 期			
8	丸 山 倉 吉	大間々	○	○		○		○	○		○	○	○	○	12.13	12.57	〃				
9	南 雲 元 一	富士見	○	○		○		○	○		○	○	○	○	12.52	12.63	〃				
10	藤 口 精 一	粕 川	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	12.52	12.54	〃

图—3 I 期広間型痕跡図

高い位置に敷居の痕跡があるところから、ヘヤの出入口はザシキに面して裏側寄りに設けられ、帳台構え⁴⁾になっていたものと推定される。コザとヘヤは2間四方の同じ広さの室であるが、これは構造上の制約から棟通り(梁行中心線)で仕切られるためである(後述)。ザシキの幅は15.1尺あり、表側半分を土壁とする。土間はダイドコと呼び、ザシキとダイドコ境の中央に大黒柱⁵⁾をたてる。この大黒柱は棟まで達する棟持柱である(図一6)。ダイドコ内には外壁より半間ほど内側に上屋柱がたつ。このうちトボーグチ近くの柱を“ソデスリバシラ”⁶⁾裏側ザシキ寄りの柱を“カマバシラ”⁷⁾とよんでいる。

ヘヤとコザの大引は梁行方向の柱通りに配され、ザシ

图—4 I 期広間型現状平面図

キでは桁行柱間が広くとられているため大引は柱間の中間にも配されている。断面は梁とほとんど変わらぬ太さで、中間を束でなく自然石で支え、両端は柱に柄差とするが、ザシキの柱間に配された大引の両端は束の上にのせられている。根太は上部に荒くチョーナ掛けした丸太を約1.5尺間隔で大引上に配するが、大引が上部に反っているところでは大引を欠いて根太上ばをそろえている(図一七)。根太は大引に釘留にしないで床板によって固定される。ザシキの床板裏側に「文化十五年寅五月破損

図-5 ヘヤとザシキ境の柱に残る痕跡

図-6 棟まで達している大黒柱

図-7 コザからザシキをみる

ものと思われる。なお、当家は江戸中期頃から末期に至るまで伊勢崎藩医を勤めた由緒ある家柄であったことが、当家に残されている「萬の覚帳」（宝歴二年）や天保九年の年号と名前の記されてある掛軸（医者が床間を背にして読書中のもの）から知られる。

No. 2 当家は、No. 1 と同様の特徴を示しているが次の3点に相違が認められる。①ザシキ幅が 13.1 尺で狭小となる⁹⁾。②ザシキ表にサマを残している。③大黒柱は棟まで達しない（図-14、No. 2）。この大黒柱は直

拵之」という墨書があり（図-8）、この年にザシキの床板が張り替えられたこと、および、コザの表側を改造した当時でも表側にサマを残していたことを考えると、これらは当家の建立年代が相当古いことを示している。

当家の建築については先祖代々からの言い伝えによれば「初代が建ったもの」とう。当家の最も古い位牌に

「大先祖天文元年十月十九日卒、等学院秀山真改居士」とある、そして、この大先祖は戦乱のため勢多郡山上の合戦⁹⁾で討死したものと伝えている。初代がこの人とすれば当家は16世紀初期頃の建築となるが、これだけでははなはだ根拠に乏しい。しかし、平面や構造の特徴から No. 3 よりも建立年代が溯る

図-8 ザシキの床板裏側に書かれた墨書

接にはザシキ上部に架けられた敷梁の端部を支え、棟は敷梁上に渡された小屋梁の上に立てられる小屋束によって支えられている。③は小屋組架構法の一つの変化とみてよい。なぜならそれは棟束を省略すると以後の民家の一般的な小屋組架構である“サス組”になるからであり、サス組出現の一契機を示しているように思われるからである。建築についての記録は明らかでないが、次に述べる No. 3 の示す各種の特徴と比較して、No. 3 よりも時代が溯り No. 1 に次ぐ古い遺構であると推定される。

5. II 期広間型遺構について

No. 3 は前記2棟の建築と同様な特徴を多く示すが、次の点に年代的な差異が認められる。①小屋組はサス構造である（棟束の消滅）。②長者柱が棟通り（梁行中心線）からずれる。③ザシキ表は土壁が消滅してサマだけ

図-9 II期広間型復原平面図

图—10 II期広間型痕跡図

を残す。④ザシキ幅が 12.9 尺となりさらに狭くなっている。

当家は前述のⅠ期遺構に比べて梁行規模が0.5間小さくなっている。しかし、コザはⅠ期と同じ広さにとられているため、その影響がヘヤにおよんで、ヘヤの奥行はその分だけ狭められている。このためコザとヘヤの間仕切壁は棟通りより約1.5尺ほど裏側へ移動し、これにしたがって長者柱も棟通りからずれることになったものと推察される。これはこの地方における民家の平面計画が棟持柱構造の消滅によって、ある程度の自由を得たことを示す遺構としてとくに注目される。すなわち、長者柱は棟持柱構造の消滅によっていち早く小屋組の制約から独立し、間仕切壁の位置に合わせて配置されるようになったことがうかがわれる。当家は江戸時代初期頃より大名主を勤めた家柄であり、そのことを示す多くの古文書（御水帳など）が残されている。残念ながら昭和43年に解体されてしまったが、その時柱と取付く梁の枘から大工名と建築年代を記した墨書が発見され元禄元年と記されていたという。私がこのことを知ったのは解体後5

図-11 II期広間型現状平面図

ヶ月余りも経た昭和 43 年 7 月のことであり現物を確認することができなかったのは大麥残念であった。

No. 4 は昭和 43 年の緊急調査で国の重要文化財に指定された遺構である。コザ・ザシキ境に差鴨居が使われているが、①ナンドは出入口の他は土壁で入口に帳台構えをもつ、②コザ表側の半分は土壁である。③ザシキの表側は半分が土壁で他はサマである。④上屋柱がダイドコ内にたつ、⑤ザシキ幅が 14.2 尺でコザの幅よりかなり広い。など古い様式をよく残しており、17世紀後期の建立と推定されている¹⁰⁾。

No. 5 は当初からノキシタ¹¹⁾を設けていたと思われる。ノキシタが設けられるようになると、相変わず棟通りに配される大黒柱とヘヤ・デイ¹²⁾境にたつ長者柱とのずれはさらに増し、ヘヤはノキシタの幅の分だけ奥行がせめられる。こうしてノキシタをもつ梁行4間程度

の民家におけるヘヤの奥行は約1間半となり、No. 6 のように梁行3.5間の民家ではヘヤの奥行は1間というせまい空間となる。

No. 6 はザシキの表側におけるサマが消滅し、各間に建具が入りデイ・ザシキ境に差鴨居が入るなど新しい特徴を示すが、デイの表側半分は土壁を残している。また、妻の小屋組架構は下大黒柱上から妻軒桁上に架けられた梁の妻側先端からサス組の頂点に妻合掌を配し、妻合掌は中央で束によって支えられる方法で No. 2 に近い架構を示している(図-15, No. 6)

6. III 期広間型遺構について

この期に属するもので最も古いと思われる遺構は No. 7 である。コザ・ザシキ境の中間に柱が立ち、柱間装置は No. 5 とまったく同様であるが、ダイドコの架構に進歩がみられ、I・II 期広間型にみられたダイドコの上屋柱のうち裏側の上屋柱が梁組の発達により除去されている。表側の上屋柱は省略されてはいないが、表側上屋柱に壁を付けてこの外側をノキシタにしているため、ダイドコ内には上屋柱が現われず、ダイドコは広々とした空間となった。当家は初代の先祖が建ったものと伝え、初代と伝えられている大先祖は元文元年(1736)に没しているところから18世紀初期頃の建築と推定される。

No. 8 はザシキ前面にサマを残しデイ表は半分を土

壁にしているが、ナンド・デイ境の半分を開放し、ナンドはザシキとデイの2方向から出入が可能になっている。ダイドコの架構は No. 7 と同様の方法を示す。

No. 9 はさらに開放的になり、No. 8 までみられたデイ表の土壁が消滅し、ザシキ表のサマも消滅して床一部分の表側は完全に開放され、すべて建具が入る。ダイドコの架構では表側の上屋柱も省略されて、前後の上屋・下屋境と大黒・下大黒柱間には低い位置にミカワバリ¹³⁾と呼ばれる特に太い梁が架けられ、I・II 期遺構のように上屋柱をダイドコ内に現わすことなくダイドコ空間を下屋まで有効に使用することが可能になった。

No. 10 ではザシキにサマを残しているが、コザでは当初よりトコと天井が設けられており、ダイドコ上部はミカワバリを利用して竹スノコ天井が張られている。筆者がこれまで調査した広間型遺構の中で、建築当初よりトコ・天井が設けられていた例は当家だけであった。当家は村内で現在でも有名な大地主藤口本家¹⁴⁾の分家であると伝え、当主(M. 26年生)で分家後6代目といい、遺構は分家当時建築したものであると伝える。したがっ

図-12 III期広間型復原平面図

図-13 III期広間型痕跡図

て、当家の建築年代はおおよそ 18 世紀末期頃と推定される。

7. 広間型遺構についての総括

以上の様に赤城南麓地方の広間型について遺構を例示し年次的な進化について考察してきたが、ここで広間型民家について総括する。

はじめに掲げた赤城南麓地方の 10 市町村のうち、これまでに広間型が発見されていないところは大胡町と新里村である。しかし、この 2 町村の周囲の地域（前橋市・北橋村・宮城村・粕川村・大間々町）では広間型が存在しているから、この 2 町村内にも広間型が存在していたものと推察される。調査遺構の分布は前橋市 7 棟、北橋村 4 棟、富士見村 3 棟、宮城村 2 棟、伊勢崎市 2 棟、大間々町・粕川村・玉村町各 1 棟であり、赤城山麓に近付くほど多く発見されている。これは山麓に近付くほど開発が遅れており、古民家の残存状態がよいからであると考えられる。

7.1 規模 調査遺構より推察すれば当地方の近世初期、あるいはそれを下らぬ位にまで溯ると思われる民家における主屋の規模は梁行 3.5~4 間、桁行 8~9 間におよび建坪は 28~36 坪にもなる比較的大規模なものである。近世初期の信州における史料¹⁵⁾によれば村内で本屋の規模が 25 坪をこえる民家の割合は表-2 に示す通りである。表-2、②では各家に等級が示されており上・中・下に区分されている。その内訳は上が 4 戸、中が 12 戸、下が 17 戸、不明 1 戸である。この 3 つの等級に属する民家のうち、本屋の建坪が 25 坪以上のものは上はすべて、中は 8 戸、下は 5 戸である。また、④・⑤では柱が掘立か礎石を入れたものか区別され、④では 29 戸のうち、礎石のあるもの 2 戸、不明 1 戸で他は掘立である。⑤では 46 戸中、礎石のあるもの 7 戸で他はすべて掘立柱である。このほか南関東の三浦郡木古葉村の史料¹⁶⁾によれば、本屋の規模が 25 坪をこえる民家の割合は表-3 に示すとおりである。表-3 の史料「家下反歩改帳」は年貢を免除してもらうため穀物を生産しない屋敷とその上に建てられている本屋および付属建物の

表-3 相模国三浦郡木古葉村における総戸数に対する本屋規模が 25 坪以上になる民家の戸数およびその割合

項 目 史 料	総戸数	一戸当りの 平均本屋規模 (坪)	本屋規模が 25 坪 以上の民家		史料の年代
			戸 数	総戸数に対する 割合 (%)	
「家下反歩改帳」	58	18.677	15	25.86	元禄 4 年 (1691)

規模を書き記したものである。これによると最小の本屋規模は「横 2 間、長 3 間」とあるから 6 坪で 3 戸がこれに相当し、本屋規模の最大は組頭役の家で「横 5 間 1 尺、長 8 間」と記されているところから 40 坪余りの規模となる。なお、名主役の本屋規模は「横 4 間、長 6 間半」とあるから 26 坪になる。付属建物は馬屋・灰屋・物置が記載されており、それぞれ横と長さが明記されている。しかし、馬屋・灰屋・物置の付屋建物がそろって存在する家は少なく、58 戸中 6 戸であり、このうち 4 戸は本屋規模が 25 坪以上の民家である。灰屋は総べての家に記載されており、馬屋の記載されていない家が 5 戸ある。これらの本屋規模をみるとどれも 15 坪以下の小規模民家であるから、これらの家は馬を所有していなかったものと思われる。そして、当時木古葉村では馬を所有する場合別棟の馬屋を設けていたと考えられ、主屋のダイドコに馬屋を設ける赤城南麓地方の民家と異なるところである。

先に、赤城南麓地方に残る近世初期あるいはそれを下らぬ位にまで溯ると思われる民家の主屋の規模は、建坪 28~36 坪にもおよぶ比較的大規模なものであると述べたが、これは農村における階層性を考慮する時、表-2 や表-3 から推察されるようにおそらく村内の総戸数の 3 割にも満たない上層民家であると思われる。

7.2 I 期広間型の示す平面の特質

I 期広間型の復原図によって近世初期あるいは少なくともそれをくだらぬ古い様式をうかがうことができる。梁行 4 間で桁行は 9 間余りの規模をもち南面する。床上はコザ・ヘヤ・ザシキの 3 室からなり、建坪の半分以上を土間とし、ここをダイドコと呼ぶ。ダイドコの表側片

表-2 近世初期信州 5 ケ村における総戸数に対する本屋規模が 25 坪以上になる戸数の割合およびそれらの平均持田畑表

項 目 史 料	総 戸 数	一戸当りの 平均持田畑	一戸当りの 平均本屋規模 (坪)	本屋規模が 25 坪以上の民家について			史料の年代
				戸 数	総戸数との 割合 (%)	平均持田畑	
① 「下海瀬村人別御改帳」	31	9.337 石	14.90	3	9.7	12.208 石	寛永 21 年 (1644)
② 「信州下伊那之内 小河村家なミ帳」	34	20.196 石	28.04	17	50	29.705 石	寛永 22 年 (1645)
③ 「嶋立組之内下波多村 屋帳付覚」	39	16.852 石	18.23	11	28.2	20.277 石	同 上
④ 野沢之内原村「人別帳」	29	11.610 反	18.52	6	20.7	22.726 反	承応 3 年 (1654)
⑤ 「白田村上下家別明細 帳」	46	20.810 反	21.21	12	26.1	31.887 反	同 上

隅に厩を設け、その奥の空間をオコンマヤと称し古くからここは穀類の貯蔵所とする習わしであると伝えている。ダイドコ内には表裏の外壁より半間ほど内側に上屋柱がたつ。このうちトボーグチ近くにたつ柱をソデスリバシラと呼び裏側でザシキ寄りの柱をカマバシラと呼ぶ。長者・大黒・下大黒柱はかならず棟通りに配され、直接あるいは束を通して棟を支える。コザとヘヤ境の間仕切はこれらの柱位置に合わせて棟通りで仕切られ、間仕切柱と構造柱は一体である。したがって、このような部屋割方法はコザの奥行によって自ら梁行規模を規定する結果になる。ザシキ幅について考察すると No. 1 は 15.1 尺、No. 2 は 13.1 尺であり、コザの幅よりかなり広くとられている。表—1 に各遺構のコザとザシキの幅を示しておいたが、Ⅱ期・Ⅲ期へと時代が下降するにしたがってザシキの幅はコザの幅に近付き、Ⅲ期広間型ではどの遺構でもザシキとコザの幅は近似寸法を示している。したがって、当地方の近世初期にまで溯ると思われる民家の桁行柱間は統一されていなかったと推定される。コザとザシキの表側は半分を土壁とし、他を開口部とするが No. 2 におけるザシキの開口部はサマになっており、No. 1 より閉鎖的になっている。このようにザシキ表の開口部がサマになるのは No. 1 にみられる引違い三本溝の開口部より古い方法と考えられており¹⁷⁾ No. 2 はこのような古い手法を残した遺構と考えられる。ザシキの大黒柱に近いダイドコ寄りにはイロリが設けられているから、ここで家族の団らんや軽い来客の接待が行なわれたであろう。しかし、ザシキはダイドコとの境を開放にし、建具を入れていない。それは機能にダイドコとの結び付きが強かったためではないだろうか。

7.3 Ⅱ期広間型の示す平面的特質

桁行はⅠ期広間型と変わらないが、梁行規模は 3.5 間のものが圧倒的に多く、Ⅰ期と同様にダイドコに上屋柱がたつ。No. 3, No. 4 はヘヤの出入口に帳台構えを残している。しかし、他の遺構では帳台構えが見られないから、この期はヘヤから帳台構えが消滅する時期とも考えられる。この期の遺構が示す大きな特徴は梁行 3.5 間の遺構が現われ、この規模の遺構では小屋架構にサス組を用いコザとヘヤの間仕切を棟通りよりずらしていることである。これは長者柱が棟通りに位置せず小屋組が棟持柱・棟束構造からサス構造へと転化したことにより、長者柱の配置と小屋組との関係を独立させた結果である。

この期になって梁行の小さい民家が多く現われる一つの原因は、棟持柱・棟束構造の小屋組からサス構造の小屋組に転化したことにより、梁行の柱配置にある程度の自由を与えることができるようになったためと思われる。こうして、この期の遺構になると梁行規模はコザの奥行とは無関係に決定することができるようになり、3

間半や 3 間の梁行規模も再び可能になったものと考えられる¹⁸⁾。つぎに注目される特徴は No. 5 以下にみられるようにノキシタが設けられることである。ノキシタが設けられるようになって梁行規模は拡大されるまでに至っていないため、ノキシタを取り込んだ分だけヘヤの奥行は狭くなっている。さらに注目されるのは、年代が下降するにしたがってザシキの幅が徐々に狭くなってコザ（デイ）の幅に近付くことであり、コザ（デイ）とザシキ境では時に差鴨居が使用されるようになり、新しいものではザシキ表の土壁やサマが消滅していることである。

7.4 Ⅲ期広間型の示す平面的特質

桁行規模に大差ないが、梁行は再び 4 間のものが多数となる。Ⅲ期広間型のいちじるしい特徴はⅠ・Ⅱ期広間型にみられたダイドコ内にたつ上屋柱がないことである。これはダイドコにおける架構法の大きな進歩である。そして、ヘヤとデイ境は半分を開放にし、この期の新しい遺構ではデイ表の土壁もなくなるなど、柱間装置の開放性が目立つところである。デイとザシキ境では差鴨居の使用が普遍的となる。ザシキの幅はデイの幅とほぼ等しくなる（表—1 参照）が、ザシキとダイドコ境にはまだ建具をたてこんでいない。

7.5 Ⅰ期広間型の示す構造的特質

屋根は寄棟で梁行の柱は外廻りの下屋柱・内部の上屋柱・棟通り柱と 5 列に配置され、土間に上屋を支える多くの独立柱が立つ。このような例は栃木や東北の民家にあるが、関東南部には見られない¹⁹⁾。上屋の梁間は 3 間で前後に半間の下屋を設けて梁行 4 間とする。このためダイドコには外壁より半間内側に上屋柱がたつ。だが、床上のこの部分は太い上屋桁を用いて上屋柱を抜き取っている。柱仕上げはコザに鉤が使用されているのみで他は丸刃のチョーナ仕上げとなっている。長者・大黒・下大黒柱は必ず棟通りに位置し、桁行方向の一直線上に並びたつ。そして、No. 1 の大黒柱は棟まで達して棟持柱となっている（図—6、図—14 No. 1）。No. 2 の大黒柱は棟まで達しないで敷梁を支えており、この上に架けられた小屋梁上に立てた束によって棟を支持している（図—14 No. 2）。No. 2 は比較的改造が少なかったので復原架構図（図—15 No. 2）を楽にとることができた。

妻の小屋組架構法について考察すると、下大黒柱上の

図—14 Ⅰ期広間断面図

棟束先端から妻の軒桁の上に妻合掌を配し、この中間を妻寄りの小屋梁上に立てた束で支えるだけの簡単な架構法である。この妻合掌上に水平に太い丸竹（モヤ）を約2尺間隔にゆわえ、隅部では竹の隅木上で平の丸竹（モヤ）と端を上下に重ねて荒縄でゆわえる。さらにこの上に細い丸竹（極）を約1.5尺間隔に配し、その上に茅または藁で屋根を葺き上げている。

妻側では下屋を設けていないため平と妻の軒高が異なり、軒隅では屋根に段差を生じている。

7.6 II期広間型の示す構造的特質

この期の遺構のいちじるしい構造的特徴は小屋組がサス構造へと変化したことである。サス組の出現によって長者柱は小屋組の制約から独立し、間仕切に従って棟通りからずらして配置されるようになる。こうしてサス組の出現は間仕切柱の配置を小屋組との制約から独立させることにより、梁行の柱配置にある程度の自由を与える役割を果たしたものと考えられる。これはまた、民家における梁行の空間を必要に応じて小屋組と無関係に仕切れるところから、以後の民家の平面形式の展開に重要な役割を果たしたと思われる。この期に属する遺構で新しいと思われるものでは南面に奥行半間のノキシタをもつ。これもサス組の出現により、小屋組架構と間仕切との関係が独立したことによって出現が可能になったのであろう。だが、この期の遺構はまだダイドコ内に上屋柱がたっている。

7.7 III期広間型の示す構造的特質

I・II期と同様に外観は棟高低く寄棟である。しかし、ダイドコに入ると上屋柱がないため広々としている。ダイドコの架構は前後の下屋部分と大黒・下大黒柱間の低い位置に特に太い梁を架け¹³⁾、大黒・下大黒柱間には新たに両者の柱頭をつなぐ梁がかけられ、両者の柱頭を固めると同時にその中間点でサス受梁を受ける。また、妻の小屋組架構にいちじるしい進展がみられる。外壁より半間ほど内側に小屋梁を架け、この梁上から妻寄りのサス組の頂点に妻合掌を架ける。このような架構法は早いものではII期遺構にみられる（図-15 No. 5）が、II期のものは一般に平と妻の軒高が異なるため屋根の軒隅に段差を生じてしまう。No. 5では妻側にも下屋を設けてこの欠点を解決しようとしている。III期遺構になるとこの点がさらに進展し、妻側の外壁を下屋の外側へずらし下屋を屋内にとりこんでおり、構造も下屋まで一体に架構することによって表側の平と妻の軒高をそろえている。しかし、裏側は二重に下屋を設ける場合が多いため、裏側の軒隅では相変わらず段差を生じている（図-15 No. 9, 10）。

I・II・III期を通して天井は設けられていないが、III期の中で最も新しい遺構と思われるNo. 10では当初よりコザに棹縁天井を張り、トコヤトダナを設けてい

図-15 復原架構図

る。また、ダイドコ上部はミカワバリの上に柱の位置に応じた梁行にナラシバリを架け、この上に竹簀の子天井を張っている。そして、小屋梁を省略することによって人間行動に有効な空間を造り出そうとしている（図-15 No. 10）。しかし、屋根裏への採光は考えられておらず、前面のトボーグチやサマからの光が竹簀の子の間隙を通してわずかに入るだけであった。前述したようにNo. 10の当主は明治26年生まれで、分家後6代目といい伝えているところから、当家はおよそ18世紀末期頃の建築と推定される。また、18世紀も中頃になると広間型以外に喰違四間取型や不整形田字型の遺構もみられるようになり、筆者の調査した範囲内においては18世紀末以後の新しい遺構には広間型を認めることができなかった。このようなところからNo. 10は広間型の中では最

も新しい部類に属する遺構ではないかと思われる。

8. 結 び

以上に赤城南麓地方における広間型の平面と構造について、編年序列にしたがって年次的に考察してきた。その結果この地方における広間型はおよそ 18 世紀末頃までの遺構に多くみられるものであり、平面や構造の特徴から 3 段階に区分することができた。もっとも古い遺構はコザの奥行と小屋組との関係から梁行が 4 間にとられていた。そして、梁行柱間は同一寸法にとられていたが、桁行柱間は統一されていなかった。このような古い広間型の柱間装置は閉鎖性強く、寝室の出入口に帳台構えをもち、土間には上屋柱がほぼ 1 間ごとになつた。しかし、18 世紀に入るところになると構造柱の省略が目立ち、床上の前面は土壁やサマがなくなったりして開放的な方向に向う。図一16 に広間型における構造の発展模式図を掲げておいたが、以下に広間型全般について共通した特徴を列記する。

図一16 広間型構造の原屋模式図

①土間と床上境は連続性強く開放とし建具を使用しない。②土間と床上境の柱仕上げはチョーナから併用まで。③大黒・下大黒柱は棟通りにたち大黒柱は土間側に逃げていない。④表側は柱間約 1 間とし差鴨居を使用していない。⑤四周に土台なく棟高の低い寄棟で軒はふき下し。⑥調査遺構に関する限り一般にトコ・書院・天井は設けられず小屋裏利用も考えられていない。⑦表あるいは裏の軒隅に段差を生じ四周における軒先線が同一高さになっていない。

本稿を執筆するにあたって千葉大学助教授大河直躬博士に御助言をいただきました。ここに記して心から感謝いたします。また、調査に当って心よく御協力くださった各家の持主に深甚なる謝意を表します。

なお、本稿は関東支部第 40 回学術研究発表会 (S. 44. 11 月) に発表した原稿のうち、紙面の都合で特に広間型についてまとめたものである。そして、ここに再び執筆するに当り現存遺構は再調査を実施し、また、その後新しく発見された遺構も加えて、支部発表論文の不備を補った。このほか広間型以後の各形式 (喰違四間取型・不整形田字型・田字型・多間取型) についての検討を残しているが、これらについては以後追って発表したい。

〔注〕 1) 改造が激しく復原に問題のあるもの、類似のもの、

簡単な予備調査だけで解体されてしまったものなどを除いた。その内訳は北橋村 2 棟、富士見村 2 棟、前橋市 5 棟、伊勢崎市 1 棟、玉村町 1 棟の計 11 棟であり、このうち 7 棟が解体されている。

2) 大黒柱に対してコザとヘヤ境に立つ柱を「長者柱」^{チョウジャバシラ}という。

3) 敷居の高さをゆかから 1.5 尺ほどあげて、この上部を連子にした窓のことを当地方では「サマ」と呼ぶ。

4) 寝室の出入口の構えで敷居を床面より一段高くし、鴨居の位置も低くして丈の低い開口部とし、片側に袖壁を設けて戸を引き込む形式と袖壁がなく引き違い戸にしたものなどあるが、当家では片側の柱 (下屋柱) が新しくなっているのでそのどちらの形式であったか不明である。なお、No. 3 のように鴨居を低くしていないものもある。

5) 地上り高さ 1.5 M の位置の寸法は 6.5×5.9 寸で上部にいくにしたがって細くなる。丸刃のチョーナ仕上げである。

6) トボーグチからダイドコに入るとすぐ鼻先にこの柱があり、大変わずらわしく感ずる。しかも出入のたびに衣服が触れる位置にあるのでいつの間にか「ソデスリバシラ」という名称が付けられたものと思う。

7) この柱の近くに釜が据えられたといい、今日でもこの柱に御幣をゆわえて釜神様を祀っている。

8) 群馬県郷土史辞典 (S. 40 年、群馬文化の会発行) によれば勢多郡新里村山上字城山に戦国時代の平山城である山上城跡があり、ここは藤原秀郷の子孫の山上五郎高綱とその子孫の居城という。

9) ザシキの幅は徐々に縮小して最終的にはコザ (デイ) の幅とほぼ同一の寸法となる (表一 参照)

10) 大河直躬「群馬・栃木・茨城・千葉県の家」建築と社会 10. 昭和 44 年 10 月

11) 前面のふきおろし下屋のことを「ノキシタ」と呼ぶ。

12) 当家ではヘヤの前室をコザと呼ばずにデイと呼んでいる。以下室名は統一を欠くと思われるが、当該遺構に使われている呼び名を用いることにする。

13) ダイドコの前後の上屋・下屋境と大黒・下大黒柱間の低い位置に架けられた特に太い 3 本の梁を「ミカワバリ」と呼んでいる。古老の説明によれば、これら 3 本の梁を下から見上げるとちょうど「川」の字のようにみえるので昔からそう呼んでいるということであった。

14) 江戸時代に名主を勤めていたといい伝えるが、現在それを証明する古文書などは残されていない。しかし、村内の数人の古老からの聞き取りによれば、いずれも藤口本家は昔名主を勤めていた家柄であるとのことであった。

15) 宝月圭吾先生還暦記念会編「日本社会経済史研究」近世編、吉川弘文館

16) 葉山町教育委員会編集「葉山町史料」葉山町発行

17) 文化財保護委員会監修「民家のみかた調べかた」第一法規出版発行

18) 伊藤ていじ著「中世住居史」東大出版会、p. 135 によれば室町時代の農家にも梁行 3 間や 3.5 間のものが存在したことが明らかである。しかし、年代差から構造的にこの期のものと異なるものと推察する。

U.D.C. 628.921

**LUMINANCE DISTRIBUTION AND ITS UNIFORM
BRIGHTNESS PERCEPTION**

(See Page 73)

by **ASATO KOBAYASHI** Associate Prof., Dept. of Architecture,
Kumamoto Univ. Member of A.I.J.

U.D.C. 728.3.03 : 72.071.1 (C)

A STUDY ON THE EARLY RESIDENCES DESIGNED BY J. CONDER (I)
—THE PRINCE ARISUGAWA'S RESIDENCE—

by **SHIGEKATSU ONOGI**, Assist. Prof. of Yonago Technical
College, Member of A.I.J.

This study intends to investigate the Prince Arisugawa's Residence and the Prince Kitashirakawa's Residence, which was Conder's early works.

This paper describes on the progress of the construction, the actions of Conder, the engineers in charge of the Department of Public Works, the block planning, the planning of the Prince Arisugawa's Residence completed in 1885.

U.D.C. 728.03 (521.24)

**ABOUT THE CHANGE OF THE TIMES ON THE PLANE AND
THE STRUCTURE OF THE FARM HOUSES AT THE
SOUTHERN FOOT OF MT. AKAGI (NO. 1)**

—About the Hiroma type—

by **MINORU KUWABARA** : Maebashi Technical High School.
Member of A.J.I..

The southern foot of Mt. Akagi points administrative districts of Vil. Fujimi, City Maebashi, Town Ougo, Vil. Niisato, Vil. Kasukawa, Town Oumama Town Tamamura, and City Isesaki.

In this study I will give an outline the main point of the farm houses in these districts and seek after the relation to the plane and the structure with change of the times and consider the process of the gradual development, besides classify the forms of farm houses in these stricts and account for a cause coming into existence of these forms.